巻頭言

今年も梅雨の時期がやって来た。もうすぐ明けるだろう。明けると夏だ。太陽が一杯の夏だ。

九十を過ぎてもう二、三年になるが、季節が巡ると、ああ・・・日本は本当にいい国だと思う。昔観た〝太陽がいっぱい〟という映画を思い出すが、まだアラン・ドロンが若く、あの幕切れの淡い陽光のシーンがなつかしい。

思えば、映画を最近全く観ていないことに気付いた。つまり映画館でだ。映画はちゃんとした映画館で観てこそ思い出が濃くなるのだ。

もう映画館は遥か彼方思い出の中、少年時代である。むかしむかしが懐かしい。結局、トシをとったと云うことだ。つまり人は、年がら年中トシを気になどしていない。トシを気にするようになるのには相当の年月を必要とする。大体なつかしいなどという感情は、そもそもそんなに出てくるものではない。

今年もいい年であったように、来年もいい年でありますように。

（重朝記）